

「キリストに従う」(マルコ八章三一〜三八節)

1 メシア・イエス

今週の水曜日、六日から、教会の暦では受難節に入ります。今年は四月二〇日までです。四月二一日が復活節、イースターです。約一ヶ月半、イエス・キリストの十字架を覚えながら過ごすこととなります。

使徒信条に告白されているように、イエスがお生まれになったこと、イエスが十字架につけられて死んだこと、しかし三日後によみがえったこと、そして天にのぼり、やがて救い主として世にふたたび来られること、こうしたことが信仰箇条として世々の教会が大切にしてきたことです。この中でも、中心にあるのは、その十字架の死と復活です。中心にあるというのは、私どもの救いともっとも深く関わっている出来事だということです。

イエスはパレスチナの一隅に生を受け、およそ三三年の生涯を送り、十字架につけられて人としての生は閉じられました。このイエスは、自分がこうした十字架の死を遂げるということを予想していたのでしょうか。自覚していたのでしょうか。それとも結果としてそうなってしまったということなのでしょう。

そうした疑問に今日の箇所は関わりません。いま私が申したことはかなり単純化していますが、答えははっきりしています。

それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教えはじめられた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった(三一〜三二節)。

この中の「人の子」というのは、きわめて謙遜な言い方ですが、イエスが自分を指していつている言葉です。「することになっている」という言い方は、神において必ずそうなるという意味です。「はっきりとお話しになった」の「はっきり」というのは、あからさまにとか、大胆に、ということですが、喜びをもって、確信をもってという意味もあります。

こうした言葉からイエスの思いを推察する、またそれが許されるとすれば、ここにはイエスのきわめてはっきりした思い、使命意識といったものが見えてくるように思えます。別な言い方をすれば、イエスのメシアとしての自覚です。それが言葉に表されたということです。

メシアとしての自覚といま申しました。メシアというのは、旧約聖書の言葉で、「油注がれた者」という意味ですが、救い主という含みをもっていました。救い主という意味のメシアが、新約聖書で、ギリシア語でキリストと訳されていることはご承知のとおりです。

油注がれた者であるメシアが救い主という含みをもつというのは、たとえばダビデ

がもつともよい例ですが、王となる者には油が注がれた（サムエル下二・四）、聖別の油です。神の選びと召し、祝福のしるしです。彼には公平と正義をもって国を治めることが期待されたのです。さらにメシアという呼び名は、イスラエルが国を失い他国の支配を受けるようになってからは、独立を回復し民に幸いと平安をもたらす、つまり神の救いをもたらす人として、人びとの希望の代名詞、希望をになう言葉ともなっていたのです。

新約の時代もイスラエルはローマという異教徒の支配下にあった。そこからの解放を待ち望み、メシアの現れるのを願わない人はなかった、その思いは非常に強いものだったのです。

そうした存在がメシアだとして、イエスのメシアとしての使命感といったとき、あるいはそれをイエスがはつきり自覚していたというとき、そのメシアが、民衆の心の中にあるメシアと同じでなかったのは明らかです。政治的な意味でローマ支配からの解放をイエスがかくろんでいた、考えていたというようなことでないことはいまでもありません。多くの苦しみを受けるメシア、排斥され殺されるメシア、死人の中から復活するメシアであつたからです。

2 苦難のメシア

メシアをめぐる、イエスの考え、心のうちが明らかにされたというのが、簡単にいえば今日の聖書箇所です。

ところでこのところは直前の箇所と深く関係しています。弟子たちはイエスから君たちは私を何者だと思っているのかと聞かれて、ペトロが弟子を代表し「あなたは、メシアです」と答えています（二九節）。ペトロの告白として、この福音書でもっとも重要な場面の一つです。

「イエス様、あなたこそ、メシアです」。これは答えとしてはよかつた、正しかつたのです。けれども「メシアです、キリストです」という告白によってペトロが、ということとは弟子たちが考えていたことと、イエスの考えておられたことがまったく違つていたというのが、今日の聖書箇所のもう一つのことです。イエスをいさめたペトロが反対に叱責されます。しかもそれは厳しいものでした。

イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」（三三節）。

先ほど見たように、わたしを君たちは何者だと思つているのかという弟子全体に対し発せられたイエスの問いに、ペトロが、弟子たちを代表して「あなたは、メシアです」と告白します。ここでもペトロは、弟子たち全体に代わって、イエスの厳しい叱責を受けています。

こうしたイエスの言葉を前にして、メシア・イエス、キリスト・イエスについて正しく言い表すことを求められているのは、ペトロだけではありません。弟子たちみんな

なであり、教会であり、私ども自身です。

すでに申し上げたように、メシア、すなわちキリストとは、イスラエルの民衆にとって、ユダヤの人びとにとって、外敵から、支配者から、神の民である自分たちを力をもって救済し、そして幸福をもたらす、まさにダビデのような栄光の王にほかなりませんでした。そのために神から遣わされるものだったのです。もしペテロがキリスト・イエス、メシア・イエスをそのようなメシアと考えていたのであったなら、それでは少し困る。というのもキリスト・イエスは、力を行使して、救ったり治めたりするのではなくて、十字架にかかってすべての人びとを救うお方なのですから。それが分らないとすれば、神のことを思わず、ただ人間のことしか考えていないとしてペテロとて叱責されるほかないのです。

なぜこの方は、すなわちイエスは、十字架への道を歩むことになる、ならざるをえないのでしょうか。さきほどお読みした、今日の箇所のはじめの教節が考える一つの手がかりを与えてくれます。そこに「長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され」という言葉があります。じつさいその通りのが起こるわけです。彼らだけでなくたとえばヘロデ党の者たちとか、またユダヤの民衆もそれに加わったことが後に明らかになっています。

福音書に伝えられているイエスのメッセージで私どもにもっとも分かりやすいものの一つはヨハネによる福音書三章一六節です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。世とは人間ととっていいと思います。神はすべての人を愛しておられる、その神の愛からはずれている人はだれもない、これこそイエスが身をもって伝えたことです。ところがそのことがイエスの時代のユダヤの社会、政治と宗教のできあがった体制のもとで、曇らされていきました。それゆえイエスは病気のゆえに社会から排斥されていた、あるいはらい病をわずらっている人のもとに、あるいは汚れた霊につかれた人のもとへ、また罪人、徴税人のもとに、苦しんでいる人のもとに、貧しい者たちのもとに赴いたのです。神の恵みから外れていないことをこうして伝えられたのです。そのことは、宗教の指導者たちとのあいだにあつれきを生じさせ、それだけでなくイエスは彼らに厳しい言葉を投げかけざるをえなかった。十字架への道を彼は歩んで行きます。苦難と贖いのメシアの道を歩んで行きます（イザヤ五三章）。

3 キリストに従う

今日の聖書箇所には、ここまで申しましたように、一つは、メシアとしてのイエスの自覚、もう一つは、弟子たちのメシア告白がイエスによって正されたことなど語られています。じつはもう一つはつきり語られていることがあります。それはこのイエスに従えという命令です。神の御心に従って十字架への道を歩むイエスと同じ道を歩むようにという招きです。それはどのような道でしょうか。私どもの道もまた十字架の道です。

それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」(三四～三五節)。

ヒトラーの時代、ナチズムに抵抗し殉教した若き神学者ディートリヒ・ボンヘッフアー(1906-45)は『キリストに従う』という書物(一九三七年)の最終章「キリストのかたち」の中にこう書き記しています。「イエス・キリストのご生涯はこの地上でまだ終わっていない。キリストは、そのご生涯をキリストに従う者たちの生活の中でさらに生きたもう」。

いまお読みした聖書の箇所も、いま引用したボンヘッフアーの言葉も「従う」がキーワードです。「従う」とはここで言われているように後をついていくということですが、做う(ローマ一五・五)といってもよいと思います。聖書の学校の生徒のように、といったのはカルヴァンです。つねにイエスと共にいる(三・一四)といってもよいでしょう。信じて従っていくのです。

「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」とイエスは語っています。私どもが洗礼を受けるといふことは、自分を捨てるということです。新しく生まれるということです。イエスに従うよう召しを受けている者として神を目標とした生活へ、それゆえ他と共に生きるあり方へ向けてくりかえし新しく歩み始めるということです。

そのような者は必ず自分の十字架を負うことになります。なぜなら神を目標として生活しようとするがゆえに、そこにこの世とのさまざまのあつれきの生じないはずはないからです。

「自分の十字架を背負う」。彼、イエスの十字架ではありません。イエスは、私どもが負うのはこの十字架ではない。それぞれに違った私ども一人ひとりの十字架、「自分の十字架を背負って」歩むのです。ここにはあのゴルゴタへの途上でイエスの十字架を無理矢理に負わせられた、しかしやがてイエスがそれを引き取ってくださいったキレネ人シモンの姿があったことはたしかです(一五・二一)。彼の歩む姿に最初のキリスト者たちは自分たちの歩みを重ねて見ていました。

信じる者だけが従い、従う者だけが信じる。これもボンヘッフアーのよく知られた言葉です。私どもにとつて従うための具体的な模範は聖書にあります。イエスはどのように歩まれたか、イエスならどう歩まれるだろうか、そうしたことを自らに問いかけながら、私どもも、そして教会も、イエスに従い、イエスをキリストと告白し、証しして歩みたいと思います。

(二〇一九年三月三日)